

## TAKI no TAWAGOTO

By 濱 博一

本欄担当は、書くと約束をしてくれるのですが…。締め切りは過ぎて行き…。今月も代筆で失礼致します。

本欄の担当である瀧本氏の趣味溢れる記事をお楽しみにされている方々には、このところ毎度の代筆で、申し訳ありません。私も比較的多趣味な方ではありますが、彼のような徹底追求型趣味志向を持ち合わせていないため、ついにネタも尽きてしまいました…。

今月は止む無く、本ニュースレターの裏話などを少し。あたかも編集後記のようになりますが、ご容赦ください。

本ニュースレターは、ボランティアのレギュラー陣と、ご好意でご寄稿頂ける方々のお力で発行し続けることができています。全国で出逢った方々と情報交換の場となればとの思いもありますが、何よりも毎月の締め切りにも、丁寧にご対応頂けるご好意が無ければ成り立つものではありません。

今まで60数回を数えた長期連載の1コーナーをご担当いただいてきましたSさんが今月から一身上のご都合でリタイヤされました。親しみあるテーマからも人気を集めていたコーナーで大変残念なのですが、全くの好意に甘えている状態ですので、こちらから一切のご無理を申し上げることはできず、他のコーナーの方にもご協力を頂き、急遽紙面を変更して今月号をお届けできることとなりました。

編集と言う業務の目に見えぬ陰の力を垣間見る思いがしています。紙面発行が仕事ではありませんので、まあプロから見ると、かなり融通を利かせさせていただく「甘え」の多いレベルに過ぎ無いのですが…。

非営利の紙面ですので、ご寄稿という形で応援をいただけることが何よりのお力添えとなります。引き続き、宜しくお願い致します。

6月発生した岩手・宮城内陸地震の被災者の皆様に心より、お見舞い申し上げます。

さて、この震災は専門家の緊急調査で、**これまでに無いほど被災地区が狭い範囲に限定されている**ことが明らかになりました。**東北の殆どの地域・観光地は全く無事**です。

にも拘らず連日の報道により、広域災害と誤解され、旅行のキャンセル・予約が入らない状況が既に東北全域に及んでいるようです。**被災周辺地域への風評被害は、経済復興の最大の障害**であり、被災地をフォローする周辺地域に対して余りにも冷酷です。どうか冷静な情報収集と判断をお願いいたします。(濱)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2008/11

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2008/11

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

## 霜 月



能登島にて  
by hama

**がんばれ！東北  
負けるな岩手・宮城！**

岩手・宮城内陸地震  
風評被害対策勝手連プロジェクトに賛  
同します！！

# 寄稿『まちづくりをみつめる』

遠州横須賀倶楽部広報奉行 横山忠志

想像してみてください。あなたが、「まちおこしイベントのために三日間、玄関と一〜二間部屋を大勢の人に開放してください」と頼まれたと。普通のひとなら、親戚縁者からの依頼でも春秋するのではないでしょうか？

ところが、このお願いに「いいですよ」と応えてくれたお宅が三十軒ある地域がありました。掛川市横須賀地区です。遡ること十年前。

このときからあの、『遠州横須賀街道ちっちゃな文化展』が始まったのです。

お話はさらに十年余、時計を戻した昭和六十二年九月にまちづくりグループ『遠州横須賀倶楽部』が発足したことに端を発します。この倶楽部は、大須賀町（当時）にヤオハンが進出するという構想の対抗実行部隊として創部しました。研究メンバーの中心だった商工会青年部を核に、農家やサラリーマン、行政マンも巻き込んで「近代的なまちづくりは無理だから、城下町の良さを伸ばしてまちづくりをしよう！合言葉は遠州横須賀ルネッサンス」と四十七・人で旗揚げ。まちづくり活動を始めたのです。

それはまちの人たちの暮らしの精神的支柱で

## 濱のいざなわ 『馳せの』

客人として招かれ、お料理を頂戴した後「馳走さま」と言っ。かつて、他家にお風呂を借りた際にも「馳走様でした」と礼を言っていたことも思い出す。

何故料理や風呂を頂くことに「馳走」の文字を当てるのか、長く不思議であった。

仕事で超一流ホテルのコンシェルジュや料亭の総料理長にお話を伺う機会を得た。本来、こちらの勝手な都合に対応いただく義理を持ち合わせている方々ではない。それでも多忙を極める中、ごの方々もみな、実に丁寧なご応対を頂いた。

わずか数時間のために、いずこも特別室を「用意頂き、茶菓の接待を賜った。ある料亭手作りの和菓子の、それはそれは深い味わいのあったこと。帰りの際、我々が見えなくなるまで、お見送りを頂いた方。その立ち姿の美しさ。いずれも忘れ難い。

一見の、それも客としてではなく、単なる取材に、ここまでおもてなしを頂くとは、全く予想だにしていなかった。超一流のプロフェッショナル、その所以を亲身体験し拜見した思いがする。

ある大学教授から、「もてなしとは『以って成す』ことである」と伺った。何を以って、何を成すのか。しかも当て付け、おしつけでなく、極自然体で。ここに日本と言つ国を持つ、人と人との出逢い、接遇に対する哲学があるのではないか。

たった一度の出逢いは、しかし長い想い出となること

ある三熊野神社を使ったフリーマーケット朝市の実施、自分たち自身がまちの良さを再認識するための『観歩記（みてあるき）』や『寺子屋』などなど。無名だった郷土をアピールするために平成元年〜七年まで『牛（ギョウ）と喰わざあ〜会』なる牛の丸焼きイベントも行いました。マスコミの方々の協力もあり、大須賀の名はそこそこ知られるようにもなりましたが「何かが・足りない」という思いが部員にはありました。

そんな中、街道活性化事業への県補助金創設の情報を得て「街道全体を美術館化する催し」を企画しました。これこそ目指していたまちづくりに近い試みとして。「会場を借りる難関」は、冒頭の住民の言葉であっさりクリアされました。

住民のみなさんが異口同音におっしゃるのは、「あんたら倶楽部がやるのなら使わない。いつもいろいろやってくれてるで」だったのです。まちづくり活動というのは、どこかでみつめてくれる人たちがいるのだ、という事を、この文化展は実証してくれたのです。



【プロフィール】  
（よ）こやまだだじゅ  
まちの広報マンが、記事のネタになれば、と飛び込んだ倶楽部で、いつの間にか広報奉行を務めてはや二十年余。掛川市在。四十九歳。）

がある。実際に逢っている時間よりも長く、心の中に「あのとき」の感覚を繰り返す味わい、時を経てまなお寄り添って幸せな気持ちにしてみよう。

そのような感動的な出逢い・接遇の瞬間の為に、事前にどれだけ準備と修練が必要であるか。

一度きり、たった数時間のお茶席のために、席のお題に推敲を重ね、お招客の好みに想いを巡らせ、しつらえに季節の味わいを滲ませる。亭主（ホスト役）の気働きは如何ばかりか。そして身は、しつらえや料理の手配のために、馳せ走り廻る…。

客人から発せられる「馳走さま」の言葉には、この一會のために人知れず馳せ走り廻ってくれたことに対して「私は感じ取らせて頂いております」と謝意を込めたものに違いない。それもたった一言。

水の如き淡交の中に、実は相手の想いに対してしっかりとした寄り添いが隠されている美学。それが脈々と息づく現代の職場があり、そこに誇りを持って携わっておられる方々の清清しさに触れられた。

仕事であるからではない。仕事であってもできていない現場が余りにも多すぎる現実を診れば、「できている」ことの有難き凄さを実感できよう。超がつくほどの一流とは、このようなことか。

目の前に出された一品にだけ、直接目に見えた部分にだけ評価を下す浅はかさ。その陰には隠された、直接は見ることができない「馳走」の数々がある。そこにこそ想いを馳せられることで、あり続けたい。

## 『モチベーションについて考える（その4）』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

今回は4つのモチベーションリソース（モチリソ）、即ち組織型、職場型、生活型、仕事型の中で、その中核を担うのは仕事型であるという話をしました。今回は、この仕事型モチリソをそうやって刺激すればいいのかについて述べます。

仕事型モチリソを考えるためには、2つの側面に分ける必要があります。一つは「仕事の結果と周辺」に属するもの。具体的にいえば、仕事から得られる金銭や地位などの報酬。また、その事への家族の喜びや仕事の環境。もう一つは「仕事それ自体」にやどる仕事の意味です。

前者の「仕事の結果と周辺」は、その原資が枯渇し始めており、うまく機能しなくなってきています。注目すべきは後者の「仕事それ自体」にやどる仕事の意味です。

具体的には、仕事の目的、仕事のプロセスから得られる発見、仕事のプロセスでの工夫の余地、仕事における裁量権、仕事の結果に対する自己評価、仕事の足跡、仕事をすることによって個人の中に蓄積できる知識・技術・人脈、仕事に対する社会・顧客・上司・組織からのフィードバック。こういったものが「仕事それ自体」にやどる仕事の意味です。

組織というものは、上に立つ人の言動に大きく影響されます。上に立つ人が日々の会話の中に、自らの「仕事それ自体」にやどる仕事の意味の体験を語ると、メンバーは自らも「仕事それ自体」にやどる仕事の意味を求めようになります。

そして、メンバーの「仕事それ自体」にやどる仕事の意味を日々聞き出すように心掛ければ、職場の中ではこの手の会話が頻繁に交わされるようになります。こうなると、仕事型モチリソが常に刺激される職場となります。

上に立つ人が、常に仕事の結果のみを求める職場。上に立つ人が、何も求めず自由放任の職場。上に立つ人が、仕事以外の話しかしない職場。上に立つ人が、常に仕事の目的と、そのプロセスでの工夫、発見、自己評価などを求める職場。この違いが職場の風土とメンバーの育成に大きな影響を与えます。

モチベーションは、コミュニケーションによって喚起され、触発され、増幅していきます。メンバーそのものをマネジメントするのではなく、職場の中でのコミュニケーションをマネジメントする。仕事型モチリソを刺激することを意識して会話をするのが、職場の風土改革やメンバーの成長スピードアップを促進します。一度お試しあれ。

## 『 アレンジャー的発想 』

合同会社アイアイシー 山田 浩市

音楽スタジオを20年以上やっていると、時代を流れている音に触れるチャンスが多くあります。俗に、好景気の時には暗い歌が流行り、景気の悪い時は明るく希望の持てる歌が流行ると言われます。音楽が景気に左右されるのかと言えば定かではありません。しかし、時代を作っていく音はあります。

機材の発達や海外ミュージシャンとの交流からも新しい音は出来ていくでしょうが、メロディーやフレーズを作り上げていくセオリーは今も昔も変わりません。

最初は単音で作られるメロディー・フレーズに、「コード」という和音を伴奏に加え、その曲のおおまかな感じを作ります。「コード」は数十種類の和音がありますが、その和音の持つ響きの特性や役割によって3種類に大別されています。

「トニック」と呼ばれるコードの種類は、その曲の基本になる和音。通常、メロディーはこのコードから始まって、このコードに帰ってきます。

「ドミナント」という種類は、トニックに戻ってくるために使うコード。メロディーを作っていくうちに迷いや方向を見失ったときに元へ戻るための繋ぎとして欠かせない役割を果たします。

もうひとつは、「サブドミナント」という種類で、これはトニックへもドミナントへも行けるコードです。ちょっと雰囲気を変えたい時や、まだ続きそうな雰囲気を維持するのに役立ちます

それでもまだ、楽曲全体のイメージや雰囲気を伝えきることは出来ません。

そこに、新しい息吹を吹き込んでいくのが「アレンジャー」の存在です。編曲者ともいわれます。

楽曲のイメージやテーマを伝えるために、どんな楽器を加え、どのように演奏させ、また簡単な和音に複雑な音を足して緊張感や安心感を出したり、時には演奏者に心の持ち方までもアドバイスをします。

お座なりのアレンジは、聴衆だけでなく演奏者の心も掴むことは出来ません。

常に時代のニーズに合った楽器や奏法を学んでいるスキルが求められますし、優れたアレンジャーは時代を先取る敏感なアンテナや、流行を作り出すアイデアを発想する力があります。

今ある商品が売れない・認知されない、新商品の企画が進まない・纏まらないときにはアレンジャーの目線がヒントになるかも知れません。

新しい組み合わせ、異業種からの発想、何かを加える、よく聞く“フレーズ”ですが、これらは全てアレンジの領域なのだと思います。

基本になるメロディーやフレーズを作り出すのが得意な人と、そこからアレンジを発想する人は必ずしも同じとは限りません。

今までメロディーばかり作らせようとして停滞していた人が、アレンジャーとして開花することもよくある話。

そういうスキルを持つ隠れた人材を探すのに音楽は適した材料になります。

## 『富士の国から ～大魔神のたび～ 富士登山 その3』 静岡県観光局 溝口 久

そろそろ涼しくなってきたので長袖にする。八合目に向かう。  
手の届くところに頂上は見える。横を見れば雪渓だ。青空が澄み渡っている。周囲は絶景、でもこちらは顔もゆがみ疲労困憊。登山道脇で腰を降ろしている人が増えてくる。当初の途中で下山する計画が、ここまで苦しいと「今後登頂することはまず無理になるな」との思いと、「この苦労を無為にってしまうのは、あまりにもったいない。何が何でも登頂してやろうじゃないか」に変わってきた。

生活倉庫の堀之内九一郎氏の言った「プールの水をスプーンで汲み出す覚悟はあるか」を思い出す。一步の積み重ねでしか物事を達成できないからと気分を奮い立たせ、重い足を引きずり出した。

ここまで来ると同行の三人のペースに差が出てくる。最も若い塚田は、どんどん見えなくなっていく。富士登山の経験のある影島は股関節の痛みを訴え、「先に行ってください」と言う。道に迷うことはない、しかも携帯はつながる。「頂上で会おう」個々が自分のペースで登り続けることになった。

八合五勺を過ぎると岩が多くなり、斜面が急になってくる。この辺りから調子が出てきた。薄い空気に体が慣れてきたからだろう。次々に「お先に」と九合目の鳥居を横目に、岩だらけになった所をよじ登るように上を目指した。

突然目の前に狛犬が現れ、その先に鳥居が現れた。残された気力と体力を振り絞り、13時少し前に登頂達成。

もう登らなくて済む。

塚田から携帯に電話が入っていた。彼は15分ほど前に着いていた。これから「お鉢めぐり」という火口一周コースが用意されているが、そこまでの気力も体力も時間も無く、まずは登頂達成記念の写真を撮ってもらい、一休み。影島の姿がまだ見えない。

そろそろ下山しようかと思っていたところに杖をついた彼が現れた。途中で下山したかと思っていた



が、野球で鍛えた心身がそれを許さなかったようだ。さて、下山だ。

砂走りと言って、殆どまっすぐに転がり降りてくるような下山道だ。砂埃がひどい。細かい火山れきが靴の中に侵入してくる。マスク、靴カバーが欠かせない。

下りは膝に負担がかかる。塚田は膝に痛みが出たらしく、何と後ろ向きで下山を続ける。真似てみるとこれが結構具合がいい。影島は杖を操りながらジグザグに下がっていく。

我高級作業靴の具合がどうもおかしい、ゴム底がはがれ始めているではないか、これはちとまずい。加えて膝がガクガクし始めた。上りより下りがしんどいと言われるが、事実だった。ただ、空気は濃くなっていくので呼吸の苦しさはもちろんない。山小屋ごとでの休憩もそこそこに先を急ぐ。五合目から出る帰りのバスは16時だ。おー、五合目の駐車場が見えてきた。

その頃、急に雲行きが怪しくなる。雨が降り始め、遠くに雷も聞こえてくる。リュックに合羽はない。この天気なら大丈夫だと下に置いてきてしまっていたのだ。それほどひどくはなるまいと思いつつ、下山を続ける。

靴のゴム底は半分取れ、足はがくがく、服は汗と雨でたっぷり水分を含んだ。「おい、まだかよー」と言ったところで誰も答えてくれるわけで無し、「間違いなく五合目に近づいていることは事実だ」と言い聞かせ、砂走りの中に足首まで埋まりながら、かかとでブレーキをかけるように足を運ぶ。

雨は上がり、雷も聞こえなくなった頃、ようやくお茶屋に着いた。ここで最後の休憩を取った。時間にそれほど余裕はない、残りの林間道を下り、五合目の登山口に到着。これでもう降りなくて済む。

16時のバスに乗ろうとバス停に向かうが、16時はなく17時だという。それはまずい、娘の誕生日の食事会に間に合わない。そこにタクシーがうまい具合に来た、車を停めてある宮口までの料金を聞くと3人で割るとバスよりも安い。ありがたい。

16時に五合目を発ち、車一新幹線と乗り継ぎ、なんと浜松のわが家に18:30に着いた。すごい達成感だ。でもまた登りたいという気持ちになるには、時間が掛かりそうだ。

その後3日間富士山登山の苦しみが続くことになる。足の痛みと首の日焼けの痛さとの闘いが待っていたのだ。（おしまい）

